

硫黄島の火山活動解説資料（令和8年9月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

今期間、島内及びその周辺海域で噴火は認められず、火山性地震はやや少ない状態で経過しました。長期的には島全体の隆起を示す地殻変動が認められ、多くの噴気地帯や噴気孔があり、各所で小規模な噴火が時々発生していることから、従来から小規模な噴火がみられていた領域や沿岸では、小規模な噴火の発生に警戒してください。

平成19年12月1日に火口周辺警報（火口周辺危険）を発表しました。また、平成24年4月27日以降の火山活動に伴い、平成24年4月29日に火山現象に関する海上警報を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1～2）

今期間、島内及びその周辺海域で噴火は確認されませんでした。阿蘇台東監視カメラによる観測では、8日に千鳥ヶ浜火口付近からの土砂噴出を観測しましたが、噴煙は観測されませんでした。また、海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、13日に千鳥ヶ浜の海上で土砂噴出が確認されました。井戸ヶ浜で白色噴気が時折観測されました。阿蘇台陥没孔からの噴気は低調に経過しました。

11日から16日にかけて海上自衛隊の協力により実施した現地調査では、千鳥ヶ浜火口で火口壁や火口湖岸付近に地熱域が一部認められ、火口壁の複数箇所でも弱い白色噴気がみられました。井戸ヶ浜火口では火口湖と高さ5m程度の白色噴気が認められました。ミリオンダラーホールでは、高温域は認められませんでした。翁浜では噴気はみられず、海岸線から約300m沖合にかけて変色水が認められました。また、赤外熱映像装置による観測では、翁浜やその沖合に熱異常は認められませんでした。

17日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、千鳥ヶ浜火口で乳白色及び茶褐色の火口湖が認められました。翁浜沖で気泡の湧出が認められました。また、島の全周に渡り茶褐色及び黄褐色～黄緑色の変色水が認められました。

・地震や微動の発生状況（図3、図4－①～③、図5－①～④）

今期間、火山性地震はやや少ない状態で経過しました。

これまでの翁浜沖や千鳥ヶ浜火口の噴火活動でみられたような単色型微動は、今期間、少ない状態で経過しました。

・地殻変動の状況（図4－④⑤、図5－⑤、図6、図7）

GNSS連続観測では、2025年11月以降、隆起が認められていましたが、8月下旬以降概ね停滞しています。長期的には、2024年頃から隆起速度に低下が認められるものの、島全体の隆起が継続しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

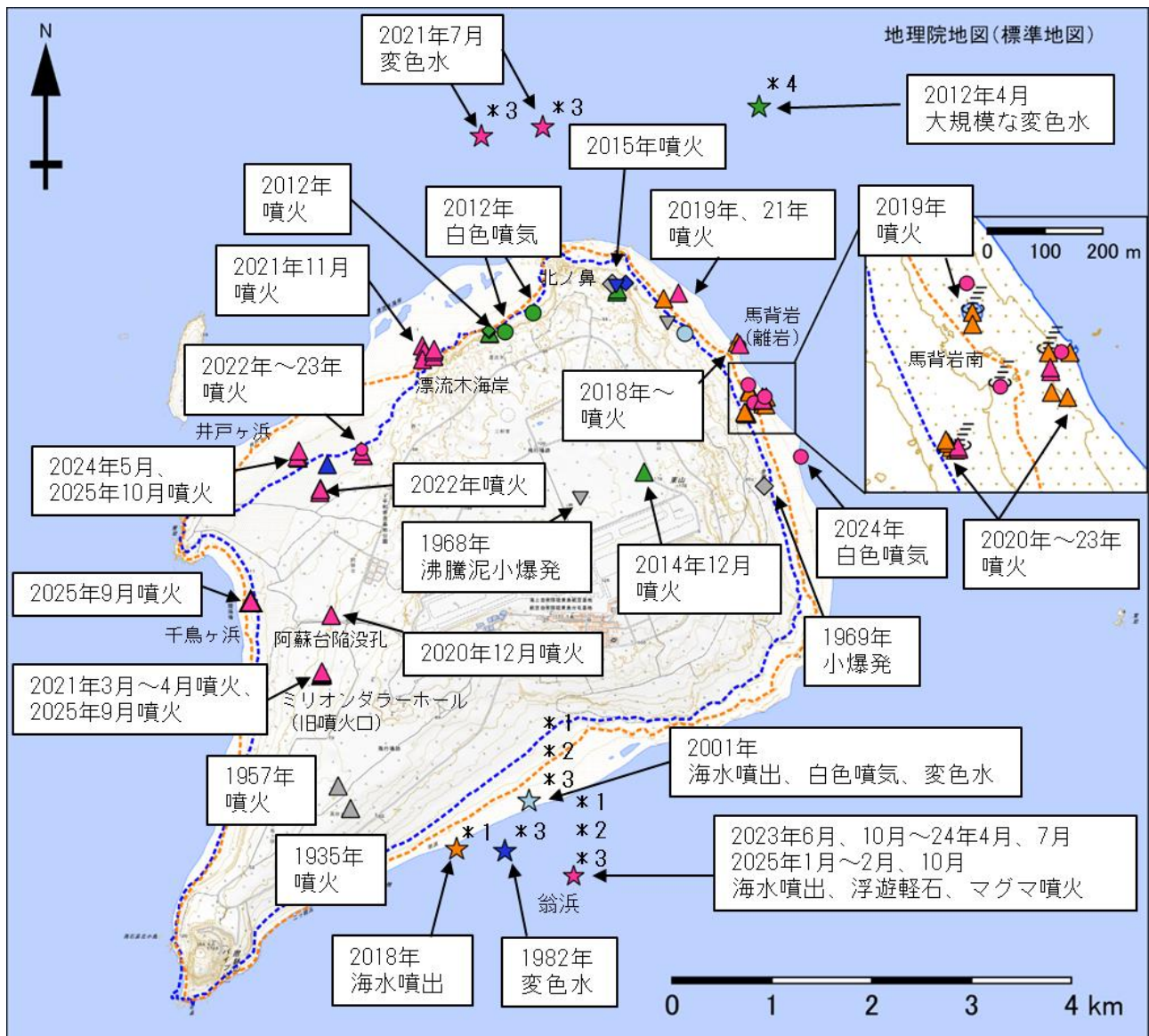
次回の火山活動解説資料（令和8年10月分）は令和8年11月10日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図2500（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。



イベントの種別	年代（色）	海岸線
△ 噴火（噴出物がごく少量のものを除く）	△ ～1970 年	--- 1978 年
▽ 噴火（規模不明）	▲ 1971 年～1990 年	--- 2016 年
◇ 詳細不明イベント	▲ 1991 年～2010 年	
○ ガス噴出イベント・熱水噴出イベント	▲ 2011 年～2015 年	
☆*1 海底噴出イベント	▲ 2016 年～2020 年	
☆*2 噴煙イベント	▲ 2021 年～	
☆*3 濃い変色水が円形に広がるように海面上に湧出		
☆*4 大規模な変色水の新たな出現		

図1 硫黄島 過去に噴火等が確認された地点及びそれらにおいて認められた現象

噴出地点及び各噴出地点で確認された現象は、関・他(2024)*（2023年8月まで）及び気象庁、海上自衛隊及び防災科学技術研究所（2023年9月以降）の観測を基に記載しています。青及び橙破線はそれぞれ1978年及び2016年の海岸線を示します。

*関晋・長井雅史・及川輝樹（2024）2002年から2023年8月における硫黄島の噴出地点。地質調査総合センター研究資料集, no. 755, 12p.+1 file (<https://www.gsj.jp/publications/pub/openfile/openfile0755.html>)。

・今期間、島内及びその周辺海域で噴火は確認されませんでした。



図2-1 硫黄島 井戸ヶ浜及び千鳥ヶ浜の状況（阿蘇台東監視カメラによる）

- ・千鳥ヶ浜火口付近では、8日に高さ30m程度まで上がる土砂噴出が観測されました。千鳥ヶ浜火口からの噴煙は観測されませんでした。
- ・井戸ヶ浜で白色噴気が時折観測されました。阿蘇台陥没孔からの噴気は低調に経過しました。

<千鳥ヶ浜>

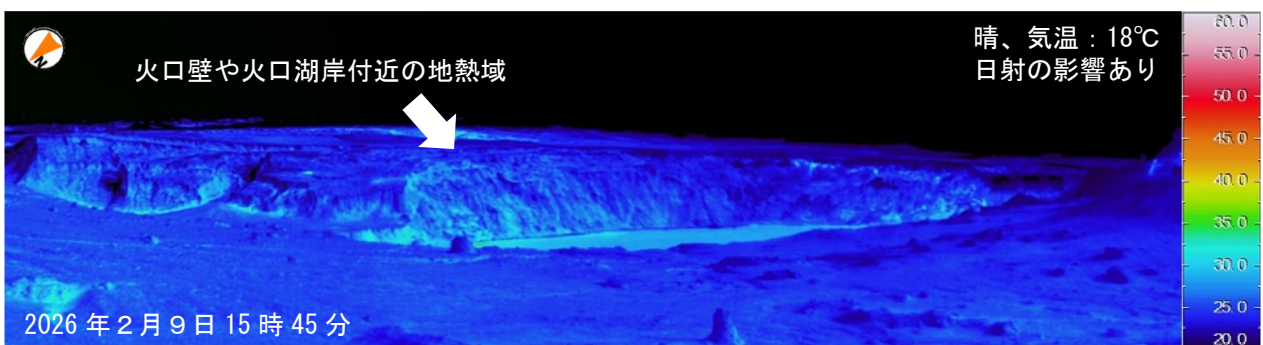
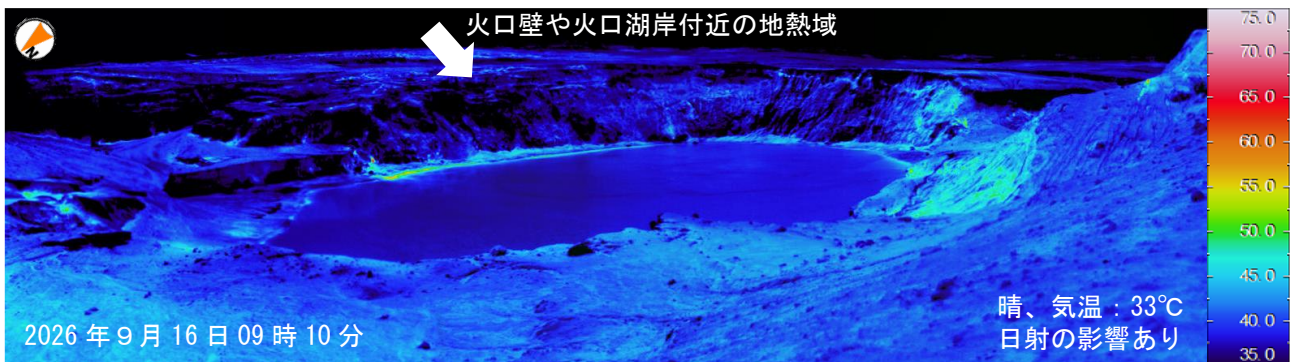
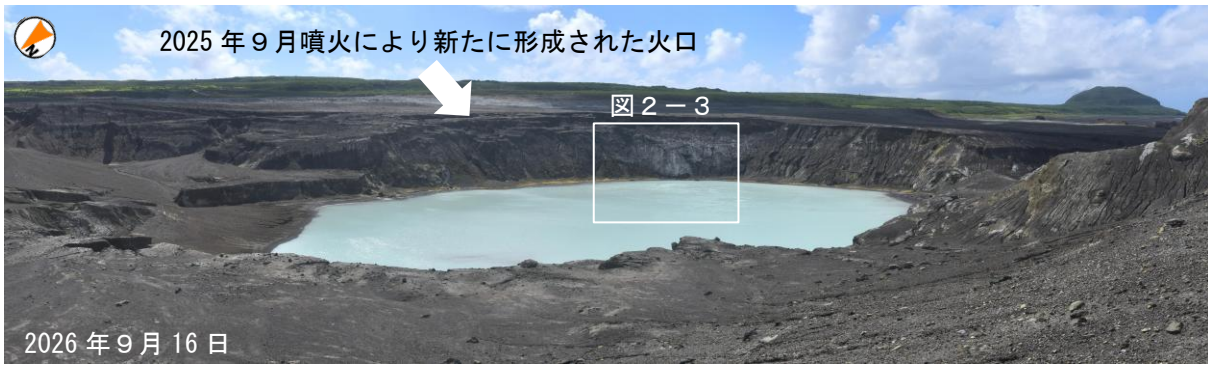


図 2-2 硫黄島 北西から見た千鳥ヶ浜火口の状況（撮影位置はやや異なる）

- ・ 16 日に実施した現地調査では、2025 年 9 月の噴火で形成された千鳥ヶ浜火口で、火口壁や火口湖岸付近の一部に地熱域が認められました。また、火口壁の複数箇所弱い白色噴気がみられました。
- ・ 前回（2026 年 2 月）同様、火口内に乳白色の火口湖が認められました。



図 2－3 硫黄島 千鳥ヶ浜火口の火口湖の状況

- ・千鳥ヶ浜火口に形成された火口湖の南側では、前回（2026 年 2 月）同様、湯の湧き出しが認められました。

<井戸ヶ浜>

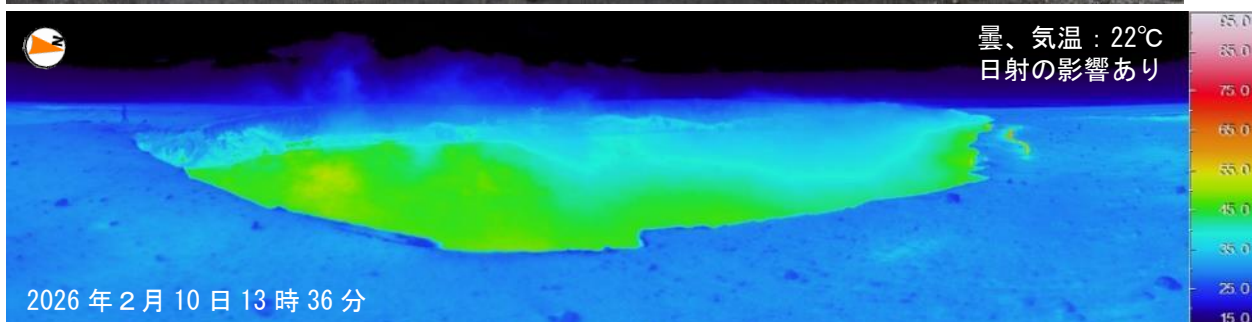
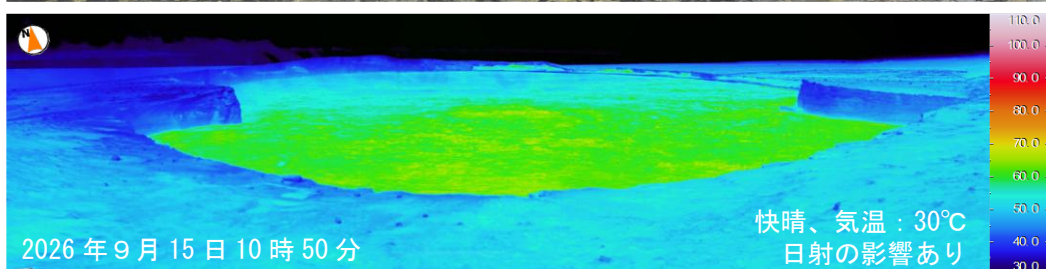


図 2－4 硫黄島 井戸ヶ浜火口の状況（撮影位置は異なる）

- ・ 15 日に実施した現地調査では、引き続き火口湖が認められ、前回（2026 年 2 月）と比較すると、火口湖の水位の上昇が認められました。
- ・ 火口湖内では 2 ヶ所の湯の湧き出しが認められました。

<ミリオンダラーホール>

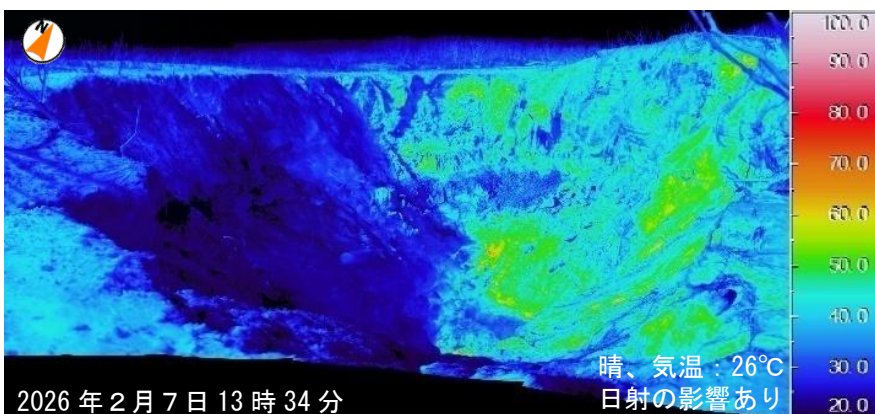


図 2－5 硫黄島 南から見たミリオンダラーホールの状況

- ・ 12 日に実施した現地調査では、火口内に日射の影響を超える高温領域は認められませんでした。
- ・ 火口底では前回（2026 年 2 月）、噴湯音を伴いながら泥水が出ていましたが、今回は泥水の湧き出しは認められませんでした。

<翁浜>

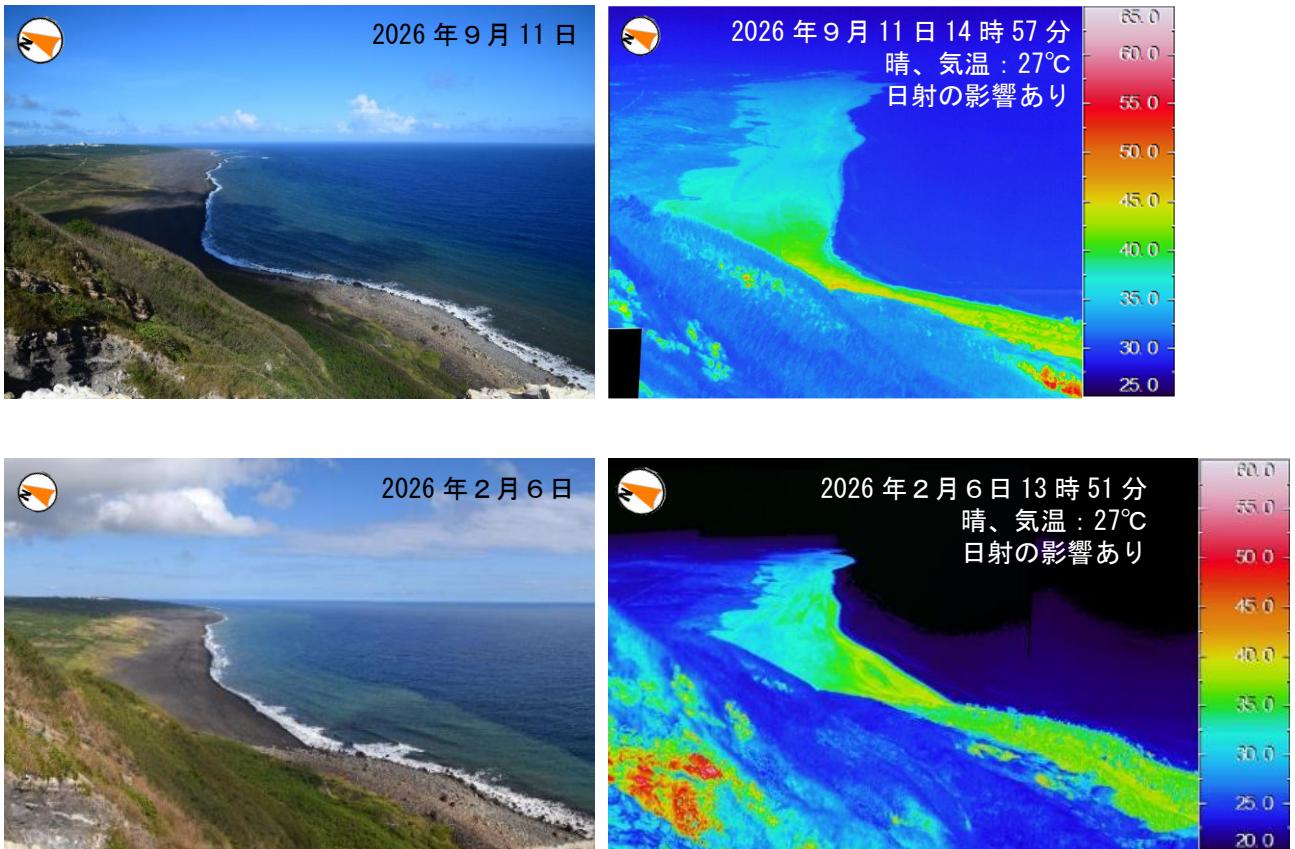


図 2－6 硫黄島 摺鉢山から見た翁浜の状況

- ・ 11 日に実施した摺鉢山からの現地調査では、翁浜で噴気はみられず、海岸線から約 300m 沖合にかけて変色水が認められました。また、赤外熱映像装置による観測では、翁浜やその沖合に熱異常は認められませんでした。
- ・ 前回（2026 年 2 月）の観測と比較して顕著な変化は認められませんでした。

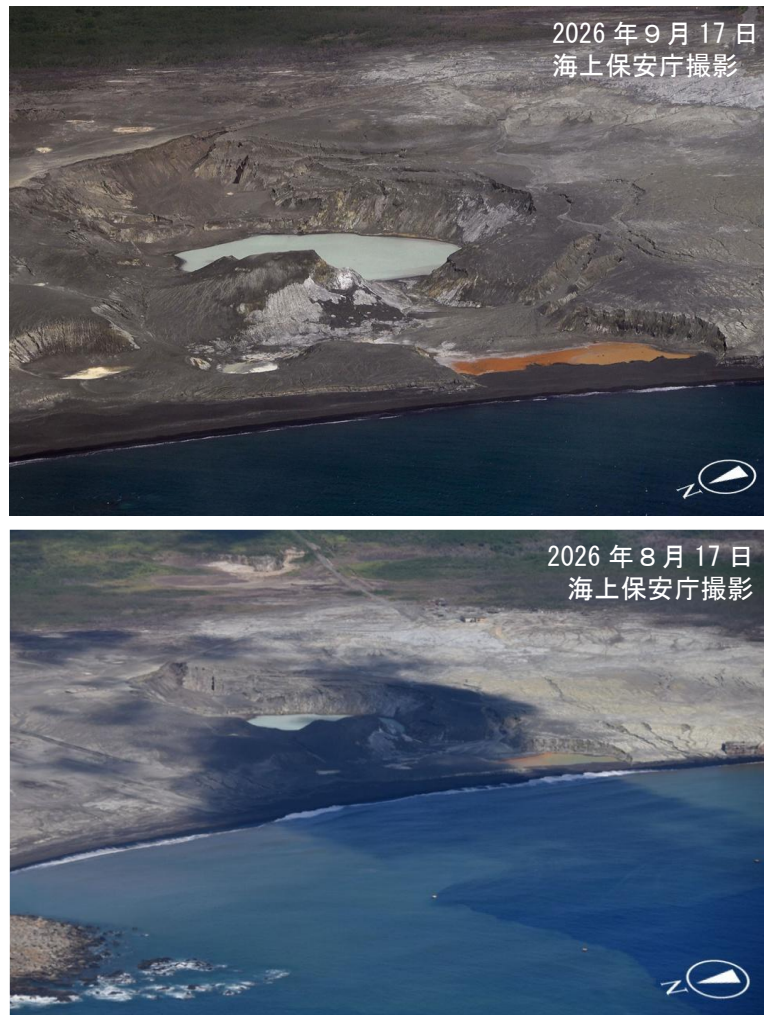


図 2－7 硫黄島 千鳥ヶ浜の状況（海上保安庁提供）

- ・ 17 日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、前回（8 月 17 日）同様、千鳥ヶ浜火口で乳白色及び茶褐色の火口湖が認められました。

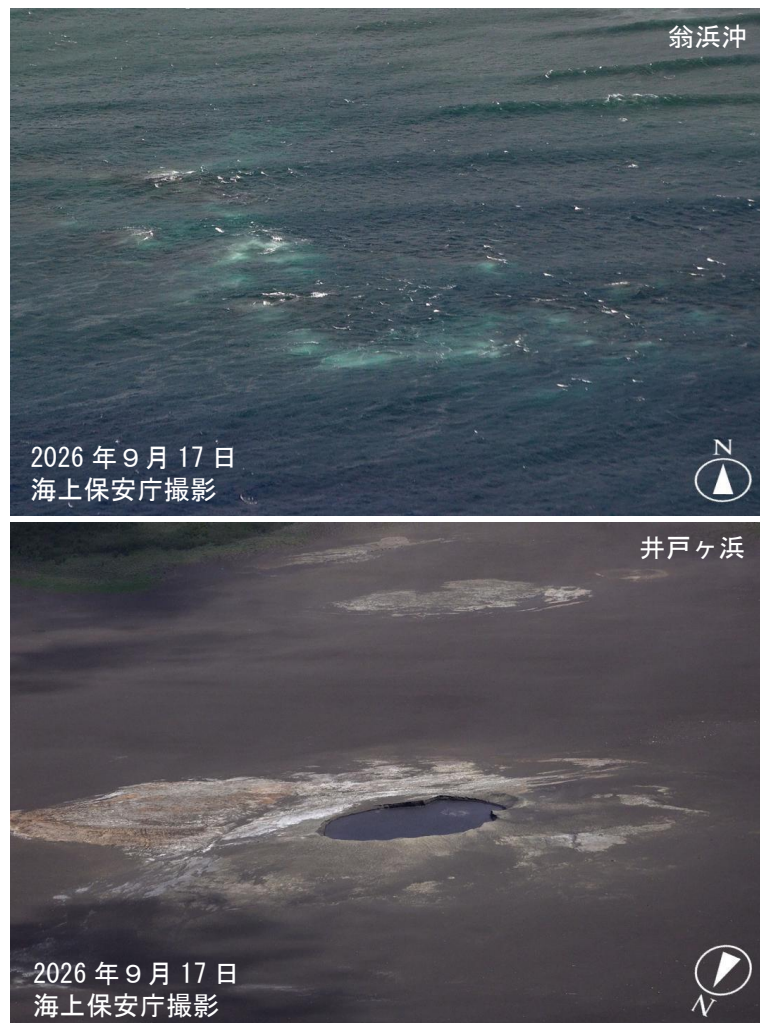


図2－8 硫黄島 翁浜沖及び井戸ヶ浜の状況（海上保安庁提供）

- ・17日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、翁浜沖のこれまで噴火があった地点で気泡の湧出が認められました。
- ・井戸ヶ浜では少量の白色噴気が認められました。

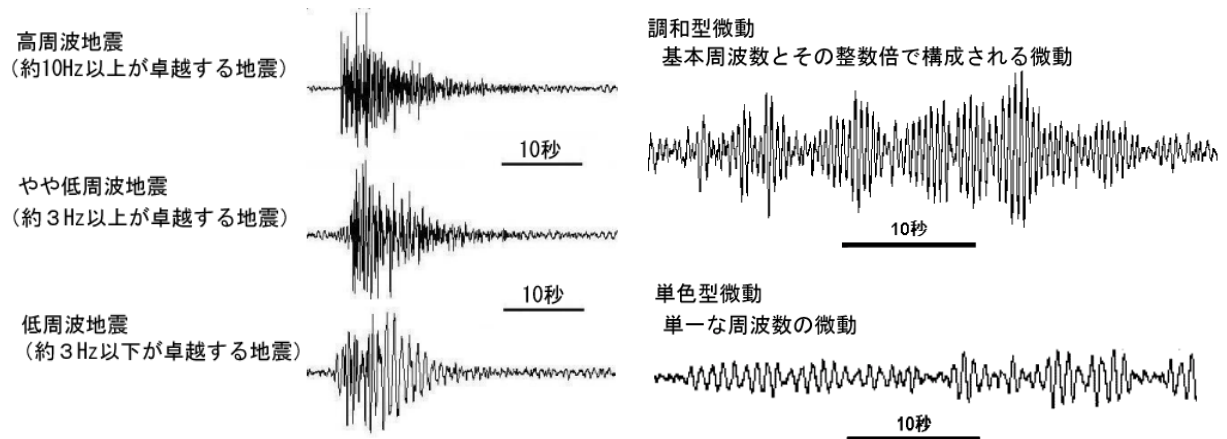


図3 硫黄島 硫黄島でみられる主な火山性地震、微動（調和型、単色型）の特徴と波形例

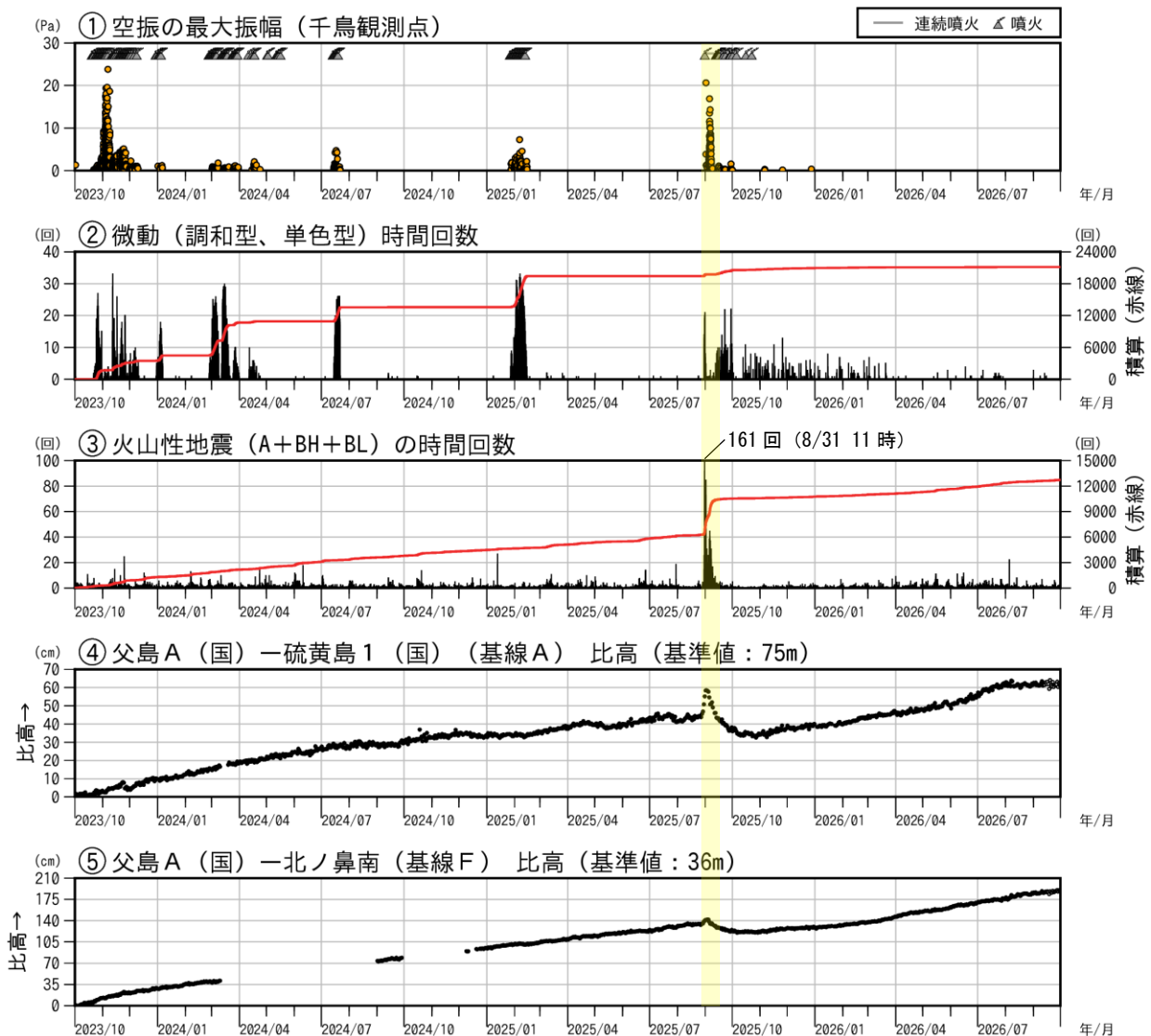


図4 硫黄島 火山活動経過図（2023年10月1日～2026年9月30日）

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 $30\mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 2.0 秒以内

千鳥観測点での空振の振幅は、上記の地震の計数基準によらず、噴火に伴う明瞭な信号であると判断した場合にのみ検測しています。ただし、ノイズレベルが大きく、噴火に伴う空振の振幅が検測できなかった期間があります。

④⑤ 父島Aに対する比高の変化（図7に対応）

（国）：国土地理院 グラフの空白部分は欠測

- ・今期間、島内及びその周辺海域で噴火は確認されませんでした。
- ・これまでの翁浜沖や千鳥ヶ浜での噴火活動でみられたような単色型微動は、今期間、少ない状態で経過しました（②）。
- ・今期間、火山性地震はやや少ない状態で経過しました（③）。
- ・GNSS 連続観測では、2025 年 11 月以降、隆起が認められていましたが、8 月下旬以降概ね停滞しています（④⑤）。
- ・2025 年 9 月に千鳥ヶ浜で発生した噴火では、噴火に先行して 8 月 30 日から地震活動が活発化するとともに、通常より大きな隆起が観測されました（黄色部分）。

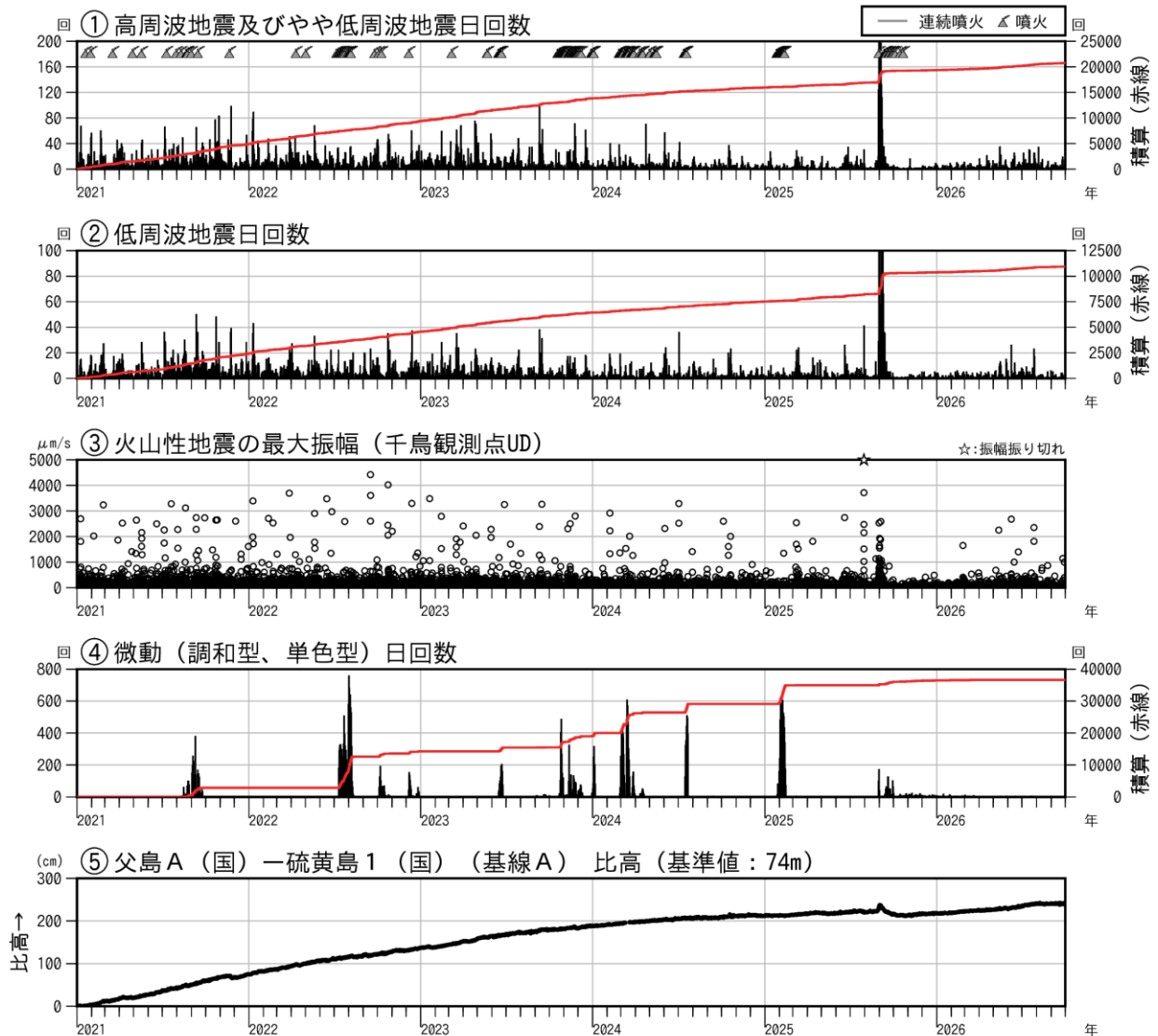


図5 硫黄島 火山活動経過図（2021年1月1日～2026年9月30日）

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 $30 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 2.0 秒以内

- ・ 中期的には 2024 年以降、それ以前と比較して火山性地震の発生頻度に低下傾向が認められていましたが、2025 年 8 月 30 日から 9 月上旬にかけて地震が増加しました。今期間はやや少ない状態で経過しました（①～③）。
- ・ 単色型微動は、2021 年以降の翁浜沖での噴火の際にも観測されています（④）。
- ・ 2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています（⑤）。

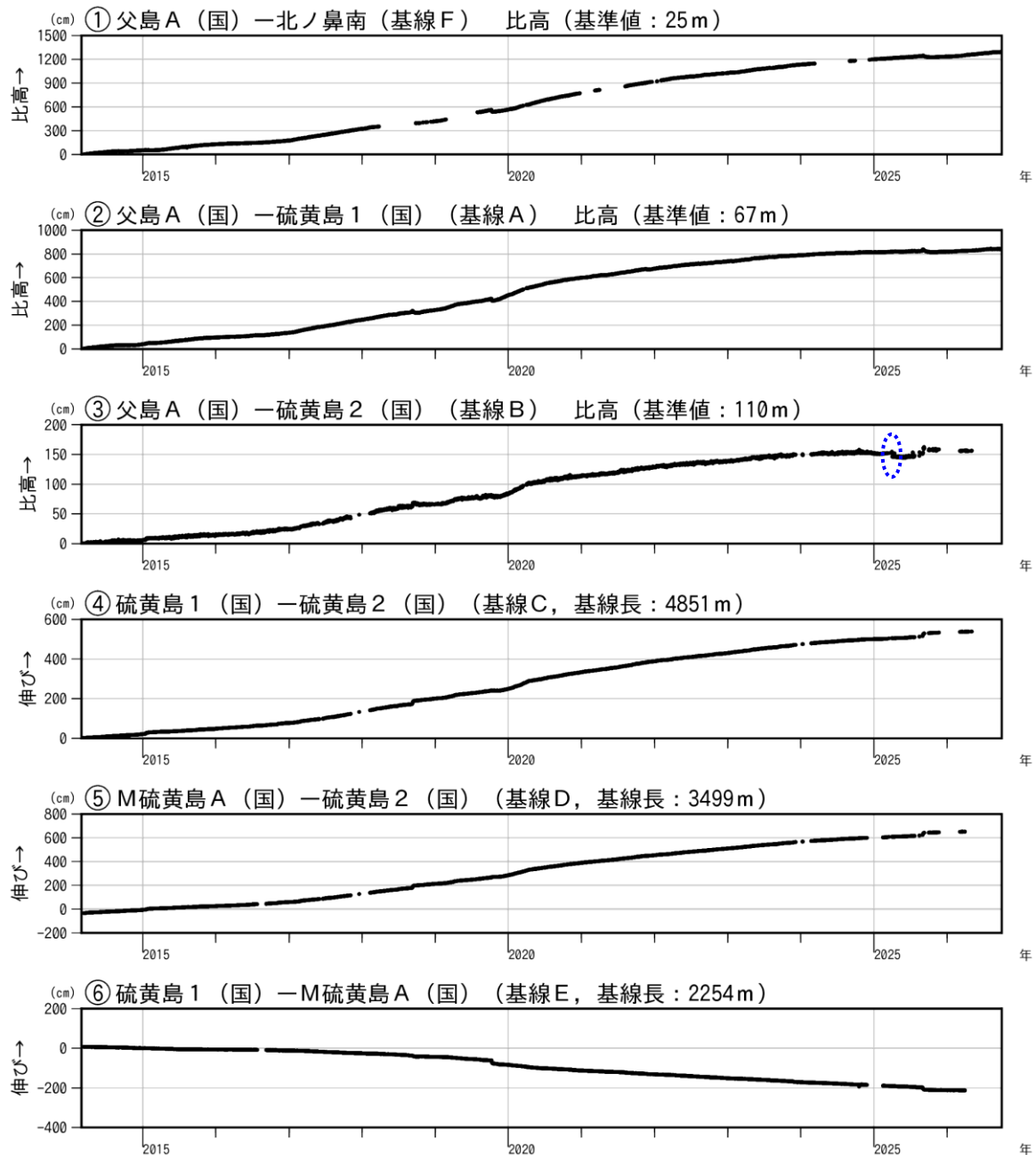
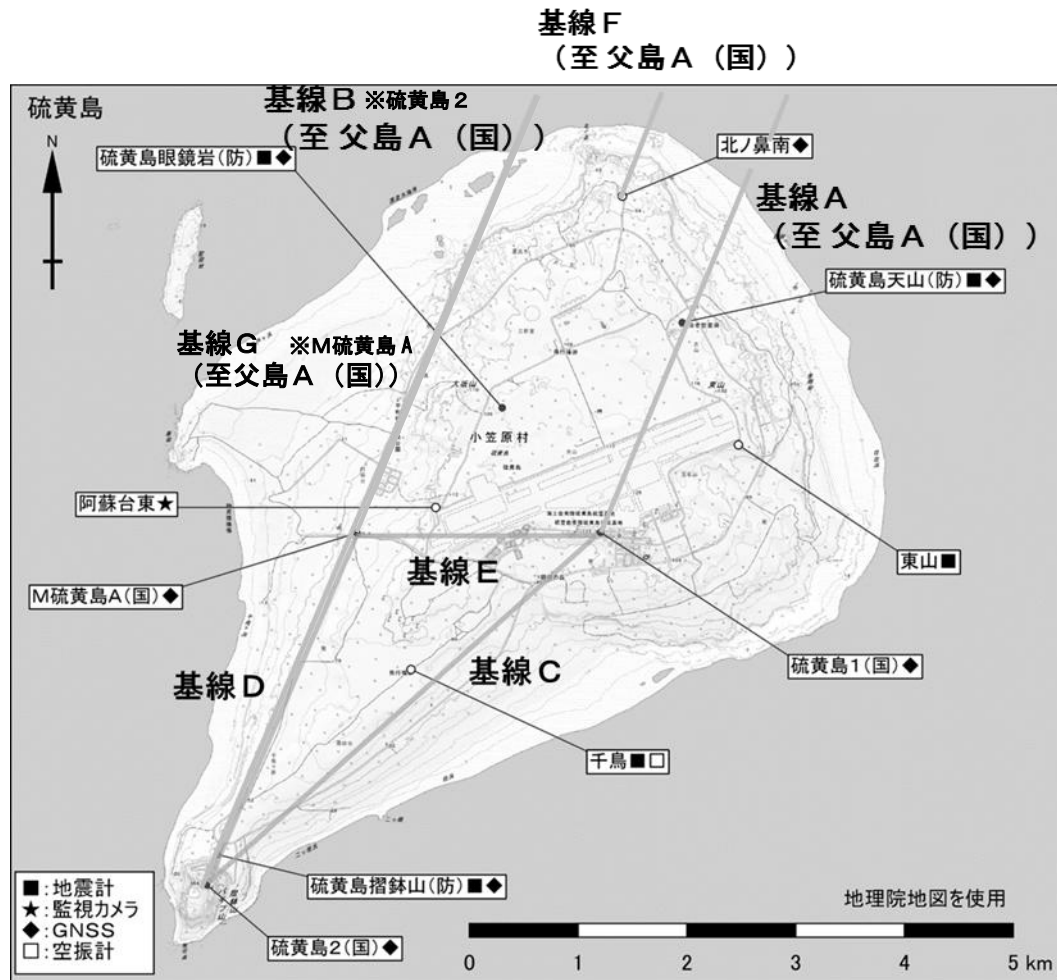


図6 硫黄島 GNSS 連続観測結果（2014 年 3 月 1 日～2026 年 9 月 30 日）

（国）：国土地理院。グラフの空白部分は欠測。

- ① 父島 A に対する北ノ鼻南の比高の変化（図 7 基線 F）
 - ② 父島 A に対する硫黄島 1 の比高の変化（図 7 基線 A）
 - ③ 父島 A に対する硫黄島 2 の比高の変化（図 7 基線 B）
 - ④ 硫黄島 1－硫黄島 2 の基線長変化（図 7 基線 C）
 - ⑤ M硫黄島 A－硫黄島 2 の基線長変化（図 7 基線 D）
 - ⑥ 硫黄島 1－M硫黄島 A の基線長変化（図 7 基線 E）
- ③青破線で示す変化は火山活動によるものではないと考えられます。

- ・ 2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています（①～③）。
- ・ 長期的に④及び⑤の基線長に伸びがみられますが、主に硫黄島 2（国）観測点で南方向の変位が継続していることによります。（M硫黄島 A（国）観測点は 2026 年 4 月 1 日から、硫黄島 2（国）観測点は同年 5 月 17 日から、それぞれ欠測となっています。）



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国):国土地理院、(防):防災科学技術研究所

図7 硫黄島 観測点配置図

GNSS 基線 (A～F) は図4～6の基線に対応しています。